

NPO 法人住まいのホームドクター／設計者の会
460-0006 名古屋市中区葵 1-27-32 カイフビル 7階

HD ニュース

No.41
2016.9.15

今後の予定／於：事務所会議室

9月20日(火)18:00～ マンション・ビル大規模修繕研究会
9月20日(火)18:30～ 研修会
10月4日(火)13:30～ 引っ越し先のかたづけ
10月8日(土)14:00～ 第12期通常総会
10月18日(火)18:00～ 相談委員会
10月18日(火)18:30～ 研修会

熊本に想う・「あたりまえ」

副理事長 森 登

旧耐震、1981年新耐震、2000年基準、耐震等級、壁量2倍、倒壊率、直下率……

これらの「コトバ」は、熊本地震を受けて、建築学会をはじめとした各研究機関により、被害の実態調査の集計・整理・分析の報告と、今後の課題らしきものがあぶりだされつつある中で、建築系専門誌、ネット情報等で頻繁に出てくるキーワードです。今後の耐震制度の改良に向けての方向性が近いうちに出てくると言われています。が、私たちからしてみれば、普段の家づくりで、「あたりまえ」としてきた内容です。

もともと柔らかい材料です。よく使うところのヤング係数は70ton/cm²～110ton/cm²しかありません。材木を、細かく切り刻んで、棒にして、効率よくジョイントしていく訳ですから、すごいことを割り切ってやっているということです。上下左右の関係を考慮して骨組みを組んでいく。横に振られた場合、上手に組んでなければ、当然、横に大きくぶれてしまう＝壊れる、あるいはパネル状に現場で組み立てて、乗っけていく訳ですから、上下左右の関係を考慮していなければ、パタッと倒れる、「あたりまえ」。「軸を組む」「構面を組み立てる」＝柱の直下率・耐力壁の直下率に繋がっています。そんなこと数字にしなくたって、当たり前でしょ！しかし、当たり前が通用しないから、今回の倒壊に繋がった！！と言われています。

議論はもっぱら「木造2階建て」をベースに、耐震性能の在り方が主体です。「壁量」の域を出ることはありません。力の流れと分散と余裕度を確認すれば良いことなのに、困ったもんです！！

住宅供給が主だった頃のnLDKから、「大きいことはいいことだ」を経て、住宅展示場が出現し、ち

よっと前までのモデル住宅には「大きな象さんのアドバルーン」＝虚像、が乗っていましたね(笑)。住宅＝ステータス、そういえば私も修業時代に悩んでいた時などは、「大きくしとけ」で片付けました。最近のテレビでは、住宅にブルドーザーを載せても潰れない??? 住宅のフレームに向かって、白鳳が突っ張りを浴びせて「びくともしない!」??? アッハッハッハ、ですよ。

ところで、今回の熊本地方には、土地柄もあって「木造3階建て」は無かったのでしょうか?都心部に同様の地震が来たとすると、「木造3階建て」はどうなる……。熊本の教訓は「木3」には何も生かされないのでしょうか?

Eデیفフェンスの「木3」実動台実験の映像を思い出します(削除されましたが)。隣棟間隔が狭いこともあって、恐らく将棋倒し……。いずれにしても地震被害が発生してから考えるしかない……。

数千万円を注ぎ込む＝負債を抱える、場合によっては2重負債、3重負債に陥る。少なくとも「我が家」は失いたくない、被害に遭った「我が家」に「入りたい」、せめて半壊・出来れば損傷で済ませたい。だけど、熊本を見ると「無理」、「あきらめる」しかない。せめて住宅難民にはならないようにしたい。建築主にとっては、マイナスのイメージが付きまっています。ネガティブからポジティブに引き戻さなくてはなりません。

ちなみに「2階建て」はそもそも必要なのでしょうか?今は、建築主はニューファミリーばかりではありません。家づくりを国策としていたころとは、ガラリと違います。敷地の大きさから、2階建てにならざるを得ない、やむを得ない、しかたがない、の時代ではありません。規模を縮小すれば、平屋は可

能、地震力も概ね半分、総工費も抑えられる、その代わり「立派」には見えにくい。

家づくりをカジュアルに捉えられれば、現実を直視できれば、平屋に可能性がある、住宅難民にならずに済む、と思います。

「な～んてことで SHOW」はダメ、劇的はダメ、立派はダメ、巨象はダメ、白鳳の突っ張りもダメ。

まずは、「ダメ出し」から「始まる」ということが、今回の熊本地震でハッキリしました。

熊本での1か月滞在を終えて（その2）

研修委員長 津島勝弥

私の調査範囲は（宿を5月27日に八代市から熊本市中央区に移してから）、南は日奈久温泉、旧坂本村（これらは八代市）、東は旧菊陽町、北は旧植木町（これらは熊本市）より西南域で、毎日、八代市と熊本市南区の主要幹線を軸に移動していました。幹線沿いはブルーシートで覆った建物が多く、補修が進まない原因は職人の数だけでなく、瓦も工場のストックが被災して足りなくなったからのようです。また、大きなビルも多数壊れ、特に国道沿いにあるピロティ形式の三菱自動車のディーラーの被害は、現地で見ると背筋が凍ります。

大きな屋根が転倒した寺の本堂、屋根瓦の棧が壁の胴縁に見える横倒しのアパート、日に日に傾いていく古家などを車から見る毎日でした。アーチの中央が下がって橋が通行不能になったり、液状化で波打つ道路と傾いた家並みに水平感覚が壊れてしまったりと、町はこの1か月の間も、続く余震で姿を変えていきました。（個々の住宅の被害については、紙幅の都合で割愛します。）

調査したマンションでは、玄関が陥没して非常口を利用していたり、（揺れの恐怖に耐えられず親戚宅に避難していて）数日後に戻ったら（上階の配管の損壊で）部屋中水浸しになっていたり、エレベーターが損壊しても修理がすぐにしてもらえず13階まで歩くしかなかったところなどがありました。分譲マンションでは、専有部分の査定と別に1棟査定（共用部分）があり、被害は大きく見てほしいけど資産

価値が下がると憂慮する人は、悩みを抱えることになります。

熊本市内での宿（水前寺公園近く）から本部がある通町筋までは市電で15分ほどの距離でしたが、一か月の仕事を終えて帰る6月1日、宿から熊本駅まで（約90分）歩いてみました。タクシー移動の毎日で調査宅以外は車中から見るしかなかったからです。無事な建物はほとんどなく続く余震に解体も補修も進まない状況でした。大きく壊れたビルの隣で元気に営業できている運命の違いはこれから解析されることでしょう。

通町からは熊本城が見られるようになり、戸建て住宅よりも“頑丈”なはずの大きなビルの損壊状況を目の当たりにします。市役所やホテルも壁の崩落や大きな割れが目立っていました。個別の被災情報がないので上ばかり見て歩いていると何度もつまずき、街中の道路がやたらとでこぼこなことに気づくのですが、タクシーの乗り心地が悪かった理由はこれだったのでしょう。足元に注意していると今度は路面に“頭上注意”の紙が…。見上げると壁のモルタルやタイルが膨れています。大きな余震は減りつつあったのですが、これにはぞっとしました。6月に入って市内の朝は日常に戻りつつあり、人通りは普段通りになったと聞きました。しかし、被災した建物にカメラを向ける人は誰一人おらず、腕章や身分証のない状況の自分は、被災建物を撮影することはとてもできなくなっていました。（次号へ続く）

■相談委員会 8/18 18:00～18:30

電話相談当番。HP「Q&A」改定について。

■木造技術研究会 8/18 19:00～20:30

『住宅省エネルギー技術 設計者講習テキスト（平成25年省エネルギー基準対応）』読み合わせ。

■三役会 9/1 18:30～20:00

■理事会 9/12 18:30～20:00

退会に伴う役員の退任および新任、12期事業および収支決算報告、13期事業および収支計画、総会日程・総会終了後の企画内容について

■木造技術研究会 9/15 19:00～20:30

『住宅省エネルギー技術～』読み合わせ。